

第4章 『華嚴経』ヴァイローチャナ仏の関わり

第1節 バーミヤーンの二大仏研究史

これまでのバーミヤーン研究では、下記に述べるように6世紀中ごろインドと中国を結ぶ交通路に大きな変化があったこと(桑山説)や、絵画様式の主題や図像の比較研究(宮治説)、あるいは歴史の概観(克蘭バーク説)等で、すでに大筋でバーミヤーンの石窟全体が6-8世紀に絞られたという指摘がなされている¹。これをうけて、二大仏(図1-32,1-33)を6-7世紀とする説について、各説を確認してみようと思う²。なぜなら、本稿で展開するチュルク(突厥)時代と年代的に直接結びつく可能性が高いからである。

1. B.ローランド説

すでに半世紀以上前であるが、アメリカのハーバード大学が行った1936年の調査の中心者ベンジャミン・ローランドは、東大仏の仏龕壁画を6世紀末から7世紀初めとする見解を示している³。それは、すでにアルフレッド・フーシェが1923年の報告で、6世紀後半以降と示唆していた点である⁴。すなわち東大仏の仏龕天井に描かれた供養者群像と仏陀の被る冠について、これがササーン王ホスローⅡ世のコイン、あるいはそれを模したエフタル王シュリー・ヴァースデーヴァに類似するという点を根拠にしたからである。このほか、D洞天井の連珠メダイオンにみえる猪頭や、真珠の首飾りをくわえる鳥の文様のあることもその裏付けとした。また猪頭の文様がみえるG洞で7世紀の写本の断片が出土したこと。B,C,Gの各洞から採取した壁画の顔料に同一性がみとめられることなども根拠にしていた。ただ二大仏については、東大仏を2-3世紀のガンダーラ仏を模したものとし、西大仏を5-6世紀 Gupta時代のマトゥラー仏に近いといい、いずれも壁画とは年代が大きく隔たっていた。その後1974年の見解では、西大仏は5-6世紀のままとし、東大仏を6世紀後半-7世紀と改めている⁵。

二大仏の性格については、早くそれが全宇宙を満たす巨像であり、華嚴の毘盧舎那(ヴァ

¹ 宮治昭『バーミヤーン,遙かなり』(NHK ブックス,日本放送出版協会,2002,p31,54), D.Klimburg-Salter, *The Kingdom of Bāmiyān : Buddhist Art and Culture of Hindu Kush*, Rome-Naples, 1989.

² 宮治昭「バーミヤーン研究史」上,下,(『名古屋大学文学部研究論集』69,1976,『弘前大学教養部文化紀要』12-1,1978)参照。

³ B. Rowland and A. K. Coomaraswamy, "The Wall-Paintings of India", *Central Asia and Ceylon*, Boston, 1938. pp.56-57. ほか幾度も指摘している。

⁴ Alfred Foucher, "Correspondence", *Journal Asiatique*, t.202,1923, pp.354-368.

⁵ B. Rowland, *The Art of Central Asia*, New York, 1974, pp.83-101. 田辺勝美「バーミヤーン東大仏の制作年代に関する一考察」『古代オリエント博物館紀要』22,2001, p.66-68 参照。

イローチャナ) 仏の観念が存在するとのべている点が注目される⁶。

2. 宮治昭説

名古屋大学の宮治昭氏は、1976年に西大仏の仏龕壁画について、6世紀前半に比定する見解を明らかにした⁷。氏はこれまでの研究史をたどり、東大仏天井壁画の供養者像や仏陀の三日月型三面冠飾が、コイン上では5-6世紀(スミス説)、7世紀(ギルシュマン説)、8世紀(ゲートル説)と各説があり、この段階では冠飾が年代の決め手にはならないとした。そして、むしろこの冠飾がササーン王にない点に注目し、豪華な肩掛けをつけた仏陀像(いわゆる飾られた仏陀)と合わせて、これがイラン系フン族との関係にあること。そして、キジール壁画との関連性を重視して、キジール壁画の500年頃とする第一様式(ヴァルトシュミット説)から、7世紀の第二様式に至らない時期までに相当するとし、第一様式がイラン化した6世紀前半に位置づけている。

1981年の論文では「飾られた仏陀」の系譜をたどり、その冠飾はアルホン系エフタルで、5世紀後半に始まり8世紀に及んでいるので、B.ローランドが指摘していた通り、バーミヤーン石窟はこのエフタルの影響下にあると述べている⁸。

したがって、突厥の関与については、バーミヤーンが玄奘のとき突厥に属していなかった様子からみて否定的である。その根拠は、突厥のヒンドゥークシュ以南の勢力が不明だとしているためである⁹。これについては後述したい。

1983年の論文では、バーミヤーン石窟内の塑像唐草文を精査した結果、ここに見える双葉形瘤節のつく連続反転渦巻文(図1-34)は、インドにおける形成過程からみて6世紀前半以前に遡ることはなく、8世紀以降に下ることも難しいと述べている¹⁰。この上限が6世紀前半以前という意味は、西大仏壁画の上限を6世紀前半とした上記の見解からすれば、6世紀前半より前を指すようであるが、いかなるものであろうか。本論文では6世紀後半からという意味のはずである。

また6世紀前半から8世紀までというのは、むしろバーミヤーン石窟の活動年代の最大幅を示すものであるから、この範囲内で当然さらに二大仏の造立時期を検討することが出来るであろう。

1991年の著書では、二大仏についてそれぞれの壁画と関係をもつとして、両大仏の順序を

⁶ B. Rowland, "The Colossal Buddhas at Bamiyan", *Journal of the Indian Society of the Oriental Art*, vol.12, 1947, pp.62-73. ヴァイローチャナのサンスクリットは Vairocana。

⁷ 宮治昭「バーミヤーン西大仏(55^トル仏)の仏龕壁画」(『国華』992,1976)。

⁸ 宮治昭「バーミヤーンの飾られた仏陀の系譜とその年代」(『仏教芸術』137,1981)。

⁹ 同上,p.29。

¹⁰ 宮治昭「バーミヤーン石窟の塑像唐草文」(『展望アジアの考古学—樋口記念論集』,新潮社,1983, p.575-588)。

東大仏がやや先行し、続いて西大仏も着手されたと述べている。そして玄奘の目撃した 629 年をどの程度遡るかは不明としつつも、6 世紀に造立されたことは間違いないとする。突厥については、玄奘時代前後に中央アジアで勢力をもったことは述べるが、バーミヤーンとの関わりについてはかなり消極的である¹¹。

3. Z.タルジ説

アフガニスタン考古局の中心者ゼマルヤライ・タルジ氏は、1977 年に出版した報告書で、バーミヤーン二大仏の造立を 7 世紀初めと推定した¹²。その根拠として、東大仏の仏龕天井に描かれた供養者群像の被る冠が、エフタルのナレンドラ王（580 年頃）の、三面三日月にオリーブの実形を立てたコインに類似していることを挙げて、これを上限とみたわけである。しかしナレンドラ王の時期があいまいなので説得力が弱く、また類似の王冠はさらに遡っても存在することを考える必要があった。下限は玄奘が大仏を見た 7 世紀中ごろをふまえ、これを降ることはないので、7 世紀初めとしている。

ちなみに一昨年の 2002 年、小谷仲男氏は、西大仏にさらに古い唐草文（図 1-35 の 1）があるとして、一般的に扱われてきた大仏の 4 世紀後半説を主張し、王冠をキダーラクシャーンにあてている¹³。しかし、筆者が書き起こした唐草文を併置してみると（図 1-35 の 2,3）瘤節らしき存在も確認できる。したがって、西大仏の唐草文を 6 世紀前半よりさらに遡るとすることは、宮治論文から考えてもあり得ないことであり、これを素直に支持することはできない¹⁴。

4. 桑山正進説

京都大学の桑山正進氏は、中国の行歴僧の記録を中心に幅広く検討した結果、1987 年の論文¹⁵と 1990 年の著書¹⁶で、インドと中国を結ぶ交通ルートが 6 世紀半ばを境にカラコルム越えからヒンドークシュ越えに大きく変わることを立証し、バーミヤーンはこの時に始めて使われ出したので、6 世紀より前のバーミヤーン石窟はありえないとした（図 1-36）。発表当初この説を信じる人は少なかったが、今では相当の重みで受け止められている。その理由は、基本的に仏教の東漸はインドから中央アジアへと時代の流れの中で進展すると考えるが、

¹¹ 上掲注 1, p.15,53,217,234。

¹² Zmaryalai Tarzi, *L'Architecture et le Décor Rupestre des Grottes de Bâmiyân*. Paris, 1977.

¹³ 小谷仲男「バーミヤーン石窟と弥勒信仰」(『富山大学人文学部紀要』36, 2002)。

¹⁴ 上掲注 10, p.585,586-587。

¹⁵ Kuwayama Shoshin, "Literary evidence for dating the Colossi Bamiyan", G.Gnoli, *Orientalia Iosephi Tucci Memoriae Dicata*, Roma, 1987, pp.703-727.

¹⁶ 桑山正進『カーピシー・ガンダーラ史研究』(京都大学人文科学研究所,1990, p.276-285, 340-349)。

この説では一旦東漸した仏教が再び西へ戻ることを想定しなければならないので、この点が問題となっていた。しかし、各国々の発展の差異や複雑な民族構成などを考慮に入れてみると、十分検討する余地が残されていることがわかる。

一方、氏はチュルク（突厥）の支配については、バーミヤーンを対象としていない。その理由は、突厥の支配が7-8世紀を中心とすることが第一で、6世紀代はあまり大きく関係しないとみていたこと。つぎにトハラ（活国）の南、クンドゥズの平原を境にバーミヤーンのある南側をエフタル領とし、その北をチュルク領として理解していたことによる。ただバーミヤーンの東、カーピシー地域における突厥種の支配については6世紀末から考えられるとしたが、ここでのチュルクとエフタルの関係は複雑で解明は今後の課題だと述べるに止まっていた¹⁷。

5. 田辺勝美説

古代オリエント博物館で研究を続け、金沢大学から中央大学へ移った田辺勝美氏は、破壊された大仏への鎮魂の意をこめて2001年に見解を明らかにした¹⁸。氏は東大仏天井画の太陽神像のつける首飾りが3個の玉をつける点に注目し、これをササーン朝コインの中のアルダシール3世（図1-37）に結びつくとした。その結果、東大仏はアルダシール3世即位の年628年以降と考え、玄奘の訪れた時はまだ東大仏は完成していなかったとしたのである。

しかし、コインには王が刻まれているのであるから、コインの王像と太陽神の像を同列に扱うべきではなく、むしろ同じ東大仏の天井では、王族と思われる供養者群像の首飾りと比較すべきであった。すると、こちらの王像は王の場合1個の玉飾りをつけ、王妃の場合は3個の玉飾りをつけていることがわかる。したがって、この壁画は王としてのアルダシール3世と直接関係していないと見るべきであり、この王の時期とは断定できないということになる。

また西大仏は、東大仏より前に造立されたと主張する点は、1928年と1933年のジョセフ・アッカンの報告書にいう、三葉形の仏龕の歪みや大仏のやや不均整な点から東大仏が先行し、より大きくまた整然とした形で進歩の跡のみられる西大仏が後行するという見解が既にあり、年代の比定は別にしても今日でも肯首できる点である¹⁹。したがって、様式による編年をまったく採用しないという点も含め、氏の主張は意味を持たないと思う。

¹⁷ 同上,p.234-235, 403-406。

¹⁸ 田辺勝美「バーミヤーン東大仏の制作年代に関する一考察—玄奘さん、見てきたような嘘をいい—」(『古代オリエント博物館紀要』22, 2001, p.63-104)。

¹⁹ A.&Y.Godard et J.Hackin, “Les Antiquites bouddhiques de Bamiyan” *MDAFA*, tome2, Paris, 1928, pp. 11-14. J.Hackin, *L’Oeuvre de la Délégation archéologique française en Afghanistan 1922-1932*. Tokyo 1933. pp.19-57のうち pp.22-23,38-39.

第2節 関係史料の吟味

1. 突厥の支配範囲

突厥（チュルク）がササーン朝のホスロー1世と同盟して563–567年の間で嚙噠（エフタル）を滅ぼしたとされている²⁰。ここではその後の、突厥の支配範囲を見てみよう。

『周書』突厥（チュルク）伝では、西魏の末（545年）土門（ブミン）可汗が西魏への通交を求めてから、その子俟斤（木杆ムカン）可汗（553年）その弟他鉢（タスパル）可汗（572年）へと受け継がれる中で、突厥の勢力が強大になり、北周末（580年）に至ると述べている。すなわち俟斤（木杆）可汗のときに西の嚙噠（エフタル）、東の契丹、北の契骨を撃ち、塞外諸国を服属させて、弟他鉢可汗のときに、中国の齊・周両国を自在にコントロールする立場にまで至ったという²¹。

『周書』嚙噠（エフタル）伝では、于闐の西、長安から1万里にある城市は10里四方、刑法風俗が突厥と同じで、人々は凶漢でよく戦闘し、于闐、安息など20余国がみな嚙噠（エフタル）に従属し、546年と553年それぞれ西魏、北周へ遣使している。が、北周明帝2（558）年に遣使した後、突厥に破られて通交は途絶えたという²²。

高昌国（トルファン）については、島崎昌氏が『続高僧伝』を引き、北周武帝保定4（564）年に釈道判が高昌に滞在した時、この国が突厥に従属し国書をその西面可汗に届けたとある記事を取りあげている²³。そして西面可汗を室点密（イステミ）可汗に充てている。

また『隋書』高昌伝では、高昌王の母が突厥可汗の娘であったこと、そして父王没後、風俗を突厥風に改めたという記事も紹介している²⁴。すなわち高昌国がこのころ突厥の西面可汗に全面的に従属していった様子を物語っているわけである。

その後隋代（581–618）では、西域諸国が突厥とどのような関係にあるか『隋書』から拾ってみよう。

疏勒（カシュガル）は毎年突厥に貢物を献上したといい、石国（タシュケント）は突厥に降り支配されたという。康国（サマルカンド）は王の妻が突厥達度可汗の娘であるといい、安国（ブハラ）は王が康国と同族で王の妻は康国の娘であるという。アムダリアの南200里にある挹怛（エフタル）は突厥が役人を派遣して支配したといい、ただ波斯（ペルシア）ま

²⁰ Edouard Chavannes, *Documents sur les Tou-kiue (Turcs) occidentaux*. St. Petersburg, 1903, p.226. 松田寿男「西突厥王庭考」(『古代天山の歴史地理学的研究』,早稲田大学出版部, 1984, p.249)参照。

²¹ 唐・令狐德芬等撰『周書』50(中華書局,1971,p.907–912)。

²² 同上,p.918。

²³ 島崎昌『隋唐時代の東トルキスタン研究』(東京大学出版会,1977,p.83),『続高僧伝』12(『大正新修大蔵経』50,同刊行会,1932,p.516–517)。

²⁴ 唐・魏徵等撰『隋書』83(中華書局, 1973,p.1846–1848)。

では突厥の勢力は及んでいないと述べている²⁵。これらの記事から西域諸国が突厥に強く支配されたことを知ることは容易である。

『隋書』はまた于闐、龜茲、焉耆などで大そう仏教が盛んであった様子を記している。が、突厥との関わりは記していない。したがって、この仏教の盛んな様子と、これら周辺の地域に及んでいた突厥の支配の状況とを重ね合わせて理解することが今後の課題として残されていると思う。

2. 玄奘の記録

646年に完成した玄奘の『大唐西域記』では、玄奘の訪問した629年に素葉水（トクマク）から鉄門（ブズガラ）の南、吐火羅（覩貨羅・トハラ）諸国一帯の27国が突厥に服属していると記している²⁶。バーミヤーンの北に突厥の勢力が及んでいたと多くの人々が認める根拠がこれである。問題は次であって、すなわち活国（クンドゥズ）から南迦畢試（カーピーシー）へかけての幹線にある闊悉多（コスト）と安胆羅縵（アンタラパーラ）の2国は突厥の支配下にあるといい、そしてバーミヤーンより南に位置する迦畢試（カーピーシー）を西南に入った弗栗特薩儻那（フビアーン）も突厥の支配下にあると言っていることである。

さらに西南の漕矩叱（ガズニ）ではとくに突厥との関係は言っていないが、注目したいのは、バーミヤーンより南にあった弗栗特薩儻（フビアーン）までが突厥の支配下にあったということ。すなわち玄奘の時、幹線からは西にひとつ道を隔てているが、梵衍那（バーミヤーン）はすでに突厥に南北からサンドイッチにされていたわけである（図1-38）。

したがって、吐火羅（トハラ）から南は不明瞭ということで、その勢力がバーミヤーンに及んでいないと見ていたこれまでの見解は見直す必要があると思われる²⁷。

桑山氏はバーミヤーン溪谷にある城砦について、積みレンガを観察して7-8世紀としたが、シュランベルジェがこれらの遺構を西突厥時代に当てていると紹介している²⁸。が、本文には残念ながら西突厥時代ではなく「前イスラム期のものとする」と表現したに止まっている²⁹。しかし、桑山氏が別に紹介したルベールの調査では、127ある城砦を5-6、6-7、8-10、11-13の各世紀にわたると分類し、大多数が8-10世紀だとするが、突厥期に相当する6-7世紀がここに含まれていることを注意したいと思う³⁰。

²⁵ 同上,p.1848-1857。

²⁶ 玄奘・弁機『大唐西域記』(『大正蔵』51,1928,p.868-947)のうち巻1のp.870-872, 巻12のp.939-940, 水谷真成訳『大唐西域記』(平凡社,1971,p.19-56,370-408)参照。

²⁷ 上掲桑山書(注17,に同じ), および注10 宮治論文, p.29-30。

²⁸ 上掲注16, 桑山書,p.418-420。

²⁹ Le Berre, M. et Schlumberger, D., “Observations sur les remparts de Bactres, Monuments Pre-islamiques d’ Afghanistan” *MDAFA* 19, Paris, 1964, p.88.

³⁰ M.Le Berre, “Monuments pre-Islamiques de l’Hindukush central” *MDAFA* 24, Paris, 1987, pp.

3. 北齊との交流

『隋書』には突厥の佗（他）鉢（タスパル）可汗が北齊に仏教を求めたという記事があり注目に値する。すでに先学の指摘はあるが、次のようにある³¹。

「齊に沙門恵琳あり。掠せられて突厥の中に入る。よりて佗鉢可汗に言いていわく、齊の国富強なるは仏法あるによるのみ。ついに説くに因縁果報の事をもってす。佗鉢聞いてこれを信ず。一伽藍を建て、使いを遣わし齊氏に聘い、浄名、涅槃、華嚴等の経ならびに十誦律を求めしむ。佗鉢また躬みずから齋戒し、塔をめぐり行道す。恨むらくは内地に生ぜざらんことを。在位 10 年、病にて卒す」

『浄名経』は『維摩経』のことで、『涅槃経』と『華嚴経』とあわせて三経が大乗教の經典で『十誦律』が小乗教の經典である。このうちバーミヤーンでは、玄奘が巨大な涅槃像の存在を伝えており、涅槃の像は壁画でも見出すことができる。涅槃像はたとえばK窟 (No.330) 西壁 (図 1-39) に見えている³²。『維摩経』の維摩居士は、中国で見る対論の様子では見えないが、在俗信者が菩薩を見守る情景として描かれたi窟 (No.530) の天井壁画がある (図 1-40)。細目の検討は今後に残されるが、白髪に見えるところは長者居士ヴィマラキールティに重なるように思われる。

したがって『華嚴経』の教主であるヴァイローチャナ (盧舎那) 仏も、バーミヤーンに存在していて決して不思議ではない。朴亨国氏の研究によると、初期の盧舎那仏の様子は 6 世紀中ごろの北齊にあつて、ほとんどが釈迦如来と同じ立像形で、また釈迦と同体異名であるという³³。『文物』誌上で紹介されている龍興寺窖藏出土北齊貼金彩繪石彫仏立像³⁴ (図 1-41) や、臨朐県博物館収蔵の北朝造像中にある盧舎那法界人中像 (図 1-42)³⁵ (残高 44cm) などは、いずれも華嚴思想による盧舎那仏像であると報告している。

やや古いが大村西崖の調査では盧舎那仏の最も多い時代が北齊で、つぎのように述べている³⁶。

「高齊に至りては盧舎那仏最も多く(20) 觀世音これに次ぎ(19) 弥勒(19) 釈迦又これに次ぎ (但し単に仏像と云ひて尊名を言はざるもの皆釈迦とすれば、釈迦最も多し) 弥陀の信仰は尙未だ盛ならざるが如し」

111-120.

³¹ 上掲注 24 『隋書』 p.1865. 護雅夫『古代遊牧帝国』(中公新書, 1976, p.218-220)参照。

³² 樋口隆康編『バーミヤーン』京都大学,1983(復刻,同朋舎,2001)1,図 59,62。

³³ 朴亨国『ヴァイローチャナ仏の図像学的研究』(法蔵館, 2001, p.36)。

³⁴ 丁明夷「繽紛入世眼雕琢尽妙諦—青州佛像断想」(『文物』文物出版社,2000-6, p.93-95),『文物』同,1998-2,1999-10,参照。

³⁵ 宮徳傑「臨朐県博物館収蔵的一批北朝造像」(『文物』同上,2002-9,p.84-92)。

³⁶ 大村西崖『支那美術史彫塑篇』1915(復刻,国書刊行会,1972)p.356-357。

朴氏の付図に示された北齊の河清 3 年 (564) 銘のある永寧寺の浮彫では、椅坐像の釈迦 (これを大像と記す) をはさんで盧舎那仏と明記した 2 体の如来形の立像 (図 1-43) が見える³⁷。とくに通肩に衣をまとった左の如来像はバーミヤーンの二大仏とよく似ている。ただし大きさの点であまりに差がある。が、これをわが国の飛鳥大仏の本 (ためし) と同じ、大きく拡大する前の像という理解にたてば一応納得できるように思われる³⁸。

またこの浮彫では盧舎那仏が 2 体並ぶことが不思議でない状況にあったことを知る事が出来て興味深い。これまで小野玄妙に始まり、和光大学の前田耕作氏や、前富山大学の小谷仲男氏、名古屋大学の宮治昭氏等が、東大仏は玄奘のいう釈迦仏であるから、西大仏は弥勒大仏の可能性が高いとする対比的な見解に対して、素朴な疑問を投げかけているからである³⁹。弥勒大仏とする根拠はバーミヤーンの西大仏仏龕頂中央に大きく描かれていたとする坐像 (図 1-44) であるが、これは剥落がひどく全体の形態のわからない、あくまで脚部の断片から推測したものであって、菩薩か仏陀の可能性はあっても弥勒の菩薩あるいは弥勒仏とする裏づけは依然として示されていない⁴⁰。

また宮治氏が示したわが国の弥勒大仏は笠置寺の大仏であるが、たとえこれが奈良時代末期に遡るとしても 8 世紀末であり、時期的に見て到底傍証になるものとは思えない⁴¹。

むしろ上記から見て、バーミヤーンの二大仏は、北齊の影響を受けた 6 世紀後半の制作と見ることが可能であるから、東西の二大仏とも釈迦仏と団体異名の存在であった盧舎那仏として、その可能性が浮かび上がることになるであろう。これについては後述する。

ちなみに、バーミヤーン西大仏の仏龕は、垂幕飾り (図 1-45) の様式が北齊のそれ (図 1-46) にかかなり近いことを伺わせているほか、二大仏と似た立像は、大きさを別とすれば北齊で見出すことは十分可能である。

その後、盧舎那仏の大仏は、中国龍門石窟の奉先寺盧舎那大仏 (672 - 675 年造立の倚坐像) や、我が国の奈良東大寺大仏殿の本尊 (745 - 752 造立の坐像) としてあり、それぞれよく知られていることは今更言うまでもない。

4. ディザブロス (室点密イステミ可汗)

突厥とバーミヤーンの関係を考えるにあたって、彼らが遊牧民族であることをどのように

³⁷ 上掲注 33, p.461. Osvald Siren, *Chinese Sculpture*, Vol.3, p.1240. London, 1925.

³⁸ 舎人親王等撰『日本書紀』22 (吉川弘文館, 1967, 国史大系本 1 下, p.147), 「今朕為造丈六仏, 以求好仏像, 汝之所獻仏本, 即合朕心」の文。

³⁹ 小野玄妙『大乘仏教芸術史の研究』1927, p.1-41, 前田耕作『巨像の風景』(中公新書, 1986, p.124-156), 小谷仲男, 上掲注 13, p.31, 38-39, 宮治昭, 上掲注 1, p.251 および p.96, 112-116。

⁴⁰ 宮治昭「バーミヤーン石窟の天井壁画の図像構成—弥勒菩薩・千仏・飾られた仏陀・涅槃図—」(『仏教芸術』191, 1990, p.11-16)。

⁴¹ 宮治昭, 上掲注 1, p.252-254。

理解するかという問題がある。はたして彼らは仏教を崇拜し、定住化した様子があるのか、という根本的な疑問である。

これについての糸口は、上記『隋書』のほかでは“ブグト碑文”（図 1-47）をあげることができる。これは 1956 年モンゴルの学者ドレジスレンが首都ウランバートルの西、ブグトで調査して明らかになった。1968 年から 70 年にかけてソ連のクシャシュトルヌイとリフシツにより解読され、碑文はソグド文字（正面と両側面）とブラーフミー文字（裏面）で記している⁴²。近年、わが国の調査チームが現地を訪れ再読を試みた結果、いくつか変更を必要とする箇所があることがわかった⁴³。

たとえば、「新しいサンガ（僧伽藍）を建てよ」は「教法の石を立てよ」となること。その結果、教法の石とは、碑文自体をさす可能性が高いという。また、始祖の「ブミン可汗」と読んだ箇所は、タスパルの子「庵羅可汗」が正しいと指摘する。その結果つぎの文になるという（文は一部省略した）。

「この法の石を突厥のアシナス族の王達が立てた。……神であるムカン可汗とマガタトパル可汗は、東から西まで全世界において支配者であった。……マガウム可汗は、父であるマガタトパル可汗のために、大きな……を作るように命令した。そしてまた、偉大な法の石を立てるように命令した」

突厥においては王が没するとその王は神となり、つぎに即位した王が先王のために法の石を立てて一族の繁栄を祈願するという形がとられていた様子が知られる。これまではサンガを彼らが建てたと読み、遊牧民の突厥も寺院を建立したと理解していたが、そこまでは書いていないということである。ただ彼らに仏教の受容がなかったということではない。法の石の法が、ブラーフミー文字で記されている点からみて、仏教の法を指していると推測できるからである。

つぎにチュルク（突厥）の始祖の一人とされるディザブロスについて考えてみよう。1889 年モンゴルのオルホン川流域で発見されたホショツァイダム碑文がその有力な根拠を与えることになった⁴⁴。突厥第二汗国のキョルテギンとその兄ビルゲ可汗について突厥文字と漢文で記した二つの碑文は、732 年と 735 年に完成したもので、1910 年デンマークの学者トムセンにより解読されラドルフによりまとめられた⁴⁵。碑文は前文で建国の祖の王名と治世の

⁴² Kljastornyj, S.G. & V.A. Livsic, “The Sogdian Inscription of Bugut Revised”. *AOH* 26-1, 1972, pp. 69-102, -8pls.

⁴³ 森安孝夫・オチル『モンゴル国現存遺跡・碑文調査研究報告』（中央ユーラシア学研究会, 1999, p.122-125 (吉田豊・森安孝夫), 林俊雄「古チュルク時代」(『中央ユーラシアの考古学』同成社, 1990, p.275-325) 参照。

⁴⁴ 護雅夫『古代トルコ民族史研究』（山川出版社, 1967, 1, p.14, 234-6, 239-40, 2, p.100）。

⁴⁵ V. Tomsen, *Inscriptions de l'Orkhon*, 1896. W. Radloff, *Die alttirkischen Inschriften der Mongolei*. Neue Folge, 1897.

様子を記し、次のようにはじまる。

「上に蒼き天、下に闇き地成りし時、両者の間に人の子生まれたり。人の子の上に、わが祖宗、ブミン可汗、イステミ可汗即きたり。即きて突厥民のその国を、その法を定め与えたり、作り与えたり」⁴⁶

ブミン可汗は突厥の初代可汗、土門（伊利）可汗のこと。イステミ可汗は、その弟で中国史料の兩唐書に室点密（瑟帝米）と音写される人物で⁴⁷、東ローマの歴史家メナンドロスが書き残した史料で、ディザブロス、シザブル、シルジブルなどとして伝えている⁴⁸。

メナンドロスの史料を内藤みどり氏の訳で見よう⁴⁹。

西暦 568 年チュルク（突厥）のディザブロス（イステミ可汗）は、ササーン朝ペルシアのホスロー1 世に使いを送ったが、2 度にわたって失敗したため、その西にある東ローマ帝国へ使いを送り、ユスティノス皇帝と友好関係を結ぶことに成功したという。

桑山正進氏は、これより以前 558 年にエフタルの北周への遣使が途絶えて以降、突厥のイステミ可汗がササーン朝ペルシアのホスロー1 世に娘を送り通婚政策を取ったと記す記録、これをドイツの古代史家フランツアルトハイムの著述（1898 年）によって紹介している⁵⁰。ササーン朝ペルシアと遺物上の文化的な類似性からみて、この通婚の可能性はあったと思われる。

さて、ユスティノス皇帝に会った使節達は次のように報告している。

「国の領内は 4 君主の統治に分かれているが、最高権力者はディザブロス（イステミ可汗）で、すでにエフタルを滅ぼした」

帰国に合わせて東ローマ帝国の使いがイステミ可汗の下に遣わされ、彼らは次のように報告している。

「彼ディザブロスは金の山（エクタグ山）にいて、天幕の中で二輪車の金の椅子に腰掛けている。酒盛りは、絹地で飾られた天幕の中で、たくさんの金銀の酒器を用いて行われ、金の孔雀に支えられた寝台や銀の像などもあり、大変豪華な生活ぶりであった」

当時のイステミ可汗の豊富な財力と権勢を伝えていて興味深い。

576 年には東ローマ帝国のティベリウス皇帝が突厥に使いを派遣した。これは当時国内に滞在していたチュルク人を追い返す意味もあったが、彼らが突厥の軍事駐屯所で会見したの

⁴⁶ 小野川秀美「突厥碑文訳注」(『満蒙史研究』4,座右宝刊行会,1943,p.40)。

⁴⁷ 唐・劉煦等撰『旧唐書』194-下(中華書局,1975,p.5188), 唐・歐陽修・宋祁撰『新唐書』215(中華書局,1975,p.6054, 6060,6064)

⁴⁸ Henry Yule and H.Cordier,“Extracts Regarding Intercourses between the Turkish Khans and the Byzantine Emperers” *Cathay and the Way thither*, vol.1,London,1915. pp. 205-207, 209-211.

⁴⁹ 内藤みどり『西突厥史研究』(早稲田大学出版部,1988, p.376-385)。

⁵⁰ 桑山正進,上掲注 16,p.145, Franz Altheim, *Die Hephthaliten in Iran Geschichte der Hunnen* Walter de Gruyter &Co. Berlin, 1960, p.260.

はディザブロス（イステミ可汗）の息子トゥルクサントスであった。ちょうどディザブロス（イステミ可汗）が亡くなり葬儀を行っている時で、彼らも突厥の風習に従い顔を傷つけられ、現場では4人の捕虜が生贄にされるのを見ている。そしてさらに遠方のタルドゥ（達頭）可汗の治所へ向かう。が、この使節を最後に両国の関係は絶たれることになる。

以上の記録から、568年から576年にかけてチュルク（突厥）と東ローマ帝国の間で直接の交流が行われていたことが明らかである。したがって、バーミヤーン西大仏の仏龕にヨーロッパ風の天人供養者達が描かれる理由として、このような交流関係を考えてみることも、恐らく可能となるであろう。

第3節 辮髪の弥勒と太陽の仏陀

1. 辮髪の弥勒

バーミヤーンにおいて現在までの遺品から突厥に結びつく証拠を見出すことは出来ないであろうか。その一つのヒントとしてE窟（No.223）の窟頂に描かれた弥勒像の髪型（図1-48）に目を向けてみよう。

この弥勒菩薩の両肩からそれぞれ4筋の編髪が垂れている様子が明らかである。これはK窟（No.330）の天井に描かれた弥勒（図1-49）でも見出すことができる（こちらは3筋）。これを北方民族特有の辮髪と見ることが可能ではないか。

原田淑人は1925（大正14）年の西域諸国の服飾を研究した著書で、『唐書』高昌伝のウイグル人について記した「俗辮髪髻垂後」や、『周書』突厥伝の「被髮左衽」を指して辮髪と認め、チュルク（突厥）の被髪は、辮髪を数条にして背後に垂らしたものと指摘している⁵¹。

白鳥庫吉もこれを支持し、『隋書』突厥伝の「索辮擊羶肉」や、玄奘の会った『慈恩伝』の突厥可汗について「可汗身著緑綾袍、以一寸許帛練後垂、達官二百余人、皆錦袍辮髪、圍繞左右」とある一文を紹介している⁵²。

『広漢和辞典』でも辮髪の辮は、編む、組む意で、辮髪で髪の毛を組み合わせる編むこと。中国周辺民族の間で古くから行われた男子の髪形としているので、上記弥勒像が辮髪である可能性は高いといえる⁵³。

旧ソ連の考古学者アリバウム氏はサマルカンドのアフラシアブで出土した壁画（図1-50,1-51,1-52）について、この広間西壁に描かれた人物群像の髪型は、編髪を分けた辮髪であると指摘している⁵⁴。

壁画にはソグド文字の銘文が残され、「アワルフーマン」とある人名は7世紀後半にサマ

⁵¹ 原田淑人『西域発見の絵画に見えたる服飾の研究』（東洋文庫、1925、p.51-56）。

⁵² 白鳥庫吉「亜細亜北族の辮髪に就いて」（『白鳥庫吉全集』5、岩波書店、1970、p.253-257）。

⁵³ 諸橋・鎌田・米山『広漢和辞典』（大修館、1982、下、p.230）。

⁵⁴ Алибаум, Л.И., Живопись Афрасиаба, Ташкент, 1975, с. 29-32. アリバウム・加藤九祚訳『古代サマルカンドの壁画』（文化出版局、1980、p.75-77）。

ルカンドで在位したワルフーマン王（『唐書』p6244で払呼纒と記す）に一致するという。

また玄奘がトクマク付近で会ったチュルク可汗の上記『慈恩伝』の漢文を訳して、次のように記している。

「可汗は緑綾の袍（ハラート）を着、髪を露にすること一丈ばかり、帛をもって顔を縛り後方に垂らしていた。達官は200人ほど、皆錦の袍を着、髪を編んで（すなわち辮髪）左右に圍繞していた」

また、モンゴル内陸アジアのステップ地帯に見られる石人のバルバル像（図1-53）が、チュルク（突厥）のものであり、襟の開いたハラート（外套、チュニックともいう）と短剣と容器と小さな袋（財布）そして長い辮髪をつけていることも明らかにしている。

また高昌（トルファン）や康国（サマルカンド）でも突厥支配下で辮髪にしていた様子をとり上げている。このほか、氏の示した突厥の葬送儀礼を表すタジキスタンのペンジケントの壁画（図1-54）でも主人公が辮髪である様子を伺うことは可能である⁵⁵。

そしてまた、クチャ（亀茲）のクムトラ石窟G K 21窟（6世紀）の主室窟頂にも、編み髪の辮髪スタイルの菩薩立像（図1-55）が多数描かれているが、これは松田寿男の指摘した突厥の関心の深さを物語っている⁵⁶。

したがって、バーミヤーンの辮髪の弥勒像を描くE窟、K窟が、やや二大仏に遅れるとしても、様式的にはほぼ同時代と見ることが出来るので、恐らく二大仏は突厥と関係を持つと言っていると思う。

2. チュニックの供養者

一方、東西二大仏には仏龕にチュニック（外套）の供養者がそれぞれ描かれている。東大仏では、天井東西に並ぶ供養者の中に複数見ることが出来、西大仏では、天井東壁の天蓋垂飾り帯の南端に、供物を頭上に載せて正座する男子像（図1-56）がそれである。このように、二大仏にいずれもチュニックの供養者が描かれているので、これを考えてみよう。

これまで両襟（あるいは片襟）を大きく開いた外套を着た像は、イラン風と呼んで理解されていた⁵⁷。たとえば、ベルリン博物館にある7世紀のキジル石窟No.224窟壁画や、東京国立博物館にあるクチャ出土の舍利容器などがよく知られている。

タジキスタンのペンジケントの壁画にも西大仏の天井画によく似たしぐさの像が見えている。またモンゴルにあるバルバルと呼ばれる突厥（チュルク）遊牧民の石像にも、この種の襟をつけた像を見ることが出来ることは既に述べた。

⁵⁵ Якубовский А.Ю., Беленицкий А.М., Костров М. М., Дьяконов М.М., Живопись древнего Пенджикента, 1954. Сб. Таб19,20,21,23.

⁵⁶ 松田寿男, 上掲注 20, p.274-279.

⁵⁷ 前田耕作「アフガニスタン・バーミヤーン石窟寺」(『みずゑ』1979-8, p.73), 同「トハロ・アフガニスタンの美術」(『世界美術大全集』東洋編,15,小学館,1999,p.223)。

このほか、パリ・ギメ博物館のソグド人祈年祭図（河南省安陽市近郊出土、北齊時代、図 1-57）にもこのようなチュニックコートを着た多数の人物像をみることができる。

図は連珠文で囲まれ、右端上部建物の中で車座する群像は、禿頭風に見えるが背後に辮髪を下げているのではないかと想像される。このように見ると、当時のチュニックを着た突厥やソグド人の遊牧民と中国の北齊王朝とのつながりは、かなり深いものであったようである。ただ、突厥とソグドおよびイランの服飾上の違いの探求は、今後の課題である。

ウズベキスタンのバラリクテパ出土の壁画（図 1-58）では、このようなチュニック服の男子像のほか婦人像でもこれに近いコートを羽織っている様子が見える⁵⁸。興味深いことに、このコートにつく夥しいハート葉文は、西大仏天井東側壁の如来坐像の光背上部につくハート葉文（図 1-59）に大そう近い。

そして連珠文の中に犬か狼らしき動物の顔が描かれていて、これが猪の顔でないことが大きな違いである。田辺氏はエフタル治下の制作としていたこれまでの見解に対し、エフタルとする特質が見られないことや、遺跡の破壊された年代が 6 世紀後半から 7 世紀初頭であることから、エフタル後の西突厥治下で制作されたものと指摘している⁵⁹。

たしかに、もし連珠文の中の動物が狼であるとすると、これは突厥の始祖伝説で狼を主人公としていることに一致する。『周書』や『隋書』では牝狼とそれに育てられた男の子が突厥の始祖阿史那氏であると記し、上述のブグト碑文の上部に狼と幼児が浮彫されていて、まさにこの記事を裏付けている⁶⁰。また『唐書』突厥伝に突厥の旗印を「牙門樹金狼頭纛」と記す点にも一致する⁶¹。

ただ、バーミヤーンD窟（No.167）前室で出土した壁画の断片（図 1-60）は、残念ながら狼頭文ではなく猪頭の連珠文である。猪頭の連珠文はイランのダムガン出土のストッコなどに見られ、バーミヤーンはこのようなイラン文化を摂取したと考えられている。またウズベキスタンのアフラシアブ宮殿の西壁画、チャガニヤンの人物像（図 1-61）の服、あるいはアスターナ出土の錦にもあり、猪頭文は中央アジアにおいて広汎に伝播した様子が伺える。すなわち、元来、古代イランで、勝利の神ヴェレスラグナの化身とされた猪の造形が、猪頭としてササン朝ペルシアへ受け継がれ、そして中央アジアへと伝播したわけである⁶²。

したがって、バーミヤーンD窟ではいまだ猪頭であったが、突厥の支配が強まるにつれて、その独自性を主張する動きの中で神話も強く打ち出されて、狼頭に変わっていったと考える

⁵⁸ Альбаум Л.И., Балалыктепе. К истории материальной культуры и искусства Тохаристана. Ташкент. 1960. Рис. 109.

⁵⁹ 田辺勝美「ササン朝美術の東方伝播」(『世界美術大全集』東洋編,15,小学館,1999,p.206)。

⁶⁰ 上掲注 21,24 参照。

⁶¹ 上掲注 47,『新唐書』(中華書局,p.6028)。

⁶² B.Rowland, *Zentralasien*, Baden-Baden,1970,ss.92-96. 宮治昭「バーミヤーン研究史」(上掲注 2, 下,p.22-23)参照。

ことがよいのではないかと思う。

3. 太陽の仏陀

これまで東大仏の天井画に太陽神（図 1-62,1-63）が描かれていることは、多くの識者が認めるところであった⁶³。そして上節でバーミヤーン二大仏の仏陀が、北齊との交流の中で盧舎那（ヴァイローチャナ）仏の可能性が高いことを指摘した。したがって、ここではこの太陽神と盧舎那仏がどのような関係にあるか、そしてまた盧舎那仏がどのような尊格かについて見てみよう。

朴亨国氏は「ヴァイローチャナは語源が示すように、広く輝く太陽を意味する」と指摘している⁶⁴。そして、その起源が古代ペルシアの太陽神のアフラマズダーや、インドアーリアンで天空の光の神を示すアスラ族の王に求めることができるという研究も紹介している。

元来、仏教は内道と外道に分けて宗教を把握するが、内道としての仏教の本尊が、たとえば太陽を意味していることを讃嘆するため、仏教以外（外道）の関係する信仰対象をもって表わすこと、すなわち太陽神などを善神として仏教内に取り込むことはごく自然なことであった。西魏時代の敦煌第 285 窟や、北魏時代の雲岡第 8 窟に見えるシヴァ神やヴィシュヌ神などは、インドの神が仏教に善神として取り込まれた一例である。

また仏典では、盧舎那仏は上記の語源を引き継いだ太陽の光の仏として知られている⁶⁵。

「盧舎那仏の大智海は光明普く照らし量あることなし」（『華嚴経』盧舎那仏品）や、「諸々の闇冥を破壊し、光明虚空に照らし、今毘盧舎那、清浄の光明を顕す」（『雑阿含経』）。そして「盧舎那とはこれ光明照の翻名なり、毘はこれ遍をいう。これ光明の遍照をいうなり」（法蔵『華嚴経探玄記』）とある通りである。

したがって、東大仏の本尊が盧舎那（ヴァイローチャナ）仏であると想定すると、それが太陽を意味することにより、それを通して同仏の天井画が太陽神であることに結びつく。このことは、すでに B. Rowland が指摘していたが十分可能なところである⁶⁶。ちなみに、西突厥のササーン朝ホスロー II 世タイプというコイン（図 1-64）には、王像の裏に太陽の神が刻出されている。上記と同じ傾向にある点が興味深い。

つぎに、ヴァイローチャナ仏が釈迦仏と団体異名であることについて『華嚴経』巻 4 でつぎのように述べている⁶⁷。

⁶³ 松本栄一「西域仏画様式の完成と極東」1-3, (『国華』465.466.469,1929)のうち 2,(466), p.250-251, 吉川逸治「バーミヤーンの壁画」上,下,(『国華』607.609,1941)のうち上,(607)p.178-181. B. Rowland, *The Art and Architecture of India*, 1953, p.108.

⁶⁴ 上掲注 33,p.23,27-28。

⁶⁵ 同上,p.27-28。

⁶⁶ B. Rowland, "Buddha and the Sun God" *Zalmocsis*, 1, 1938, pp.67-84.

⁶⁷ 東晋・仏馱拔陀羅訳『華嚴経』4, 如来名号品 (『大正蔵』9,p.419), 「此四天下仏号不同, 或称悉

「この四天下に仏号は不同なり。あるいは悉達と称し、あるいは満月と称し、あるいは獅子吼と称し、あるいは釈迦牟尼と称し、あるいは神仏と称し、あるいは盧舎那と称し、あるいは瞿曇と称し、あるいは最勝と称し、あるいは能度と称し、かくのごとき等、仏の名号を称するその数一万」

この世での仏陀の名はさまざまに呼ばれたこと、インド応誕のとき悉達(シッダールタ)、そして釈迦牟尼仏、盧舎那仏と呼ばれた等と述べている。

これによって、バーミヤーン二大仏について、玄奘は東大仏を釈迦仏と記したこと、それが実際には盧舎那仏でもあったということは『華嚴経』から見た場合は十分肯首される点だということになる。

また、二大仏が 35メートルと 53メートルという巨大な像であることについて『華嚴経』では次のように記している⁶⁸。

「無尽平等の妙法界は悉く皆如来の身に充滿す」(『華嚴経』1 世間浄眼品)

「如来の法身は法界に等し、普く衆生に応じ悉く対現す。如来の法王は衆生を化し諸法に随順し、悉く調伏す」(同上)

無尽の法界とは世界すべてを指し、これが悉く如来の身中に満ちているという、あるいは如来の法身が法界に等しいと述べているわけである。したがって、これにより『華嚴経』は如来の身をいかに大きく示そうとしたかが理解できると思う。

4. 牛頭の冠

アメリカのクリーヴランド美術館に銀製の馬のリュトン(図 1-65)とともに、水牛の上に女神のつくリュトン(図 1-66)がある⁶⁹。キューレーターのドロシー・シェパード氏は、類似のネックレスをバーミヤーンの壁画で見出すので、5~6世紀にソグドで製作されたのであろうと記している。論考ではネックレスの図示がなく明らかでないが、馬具につく十字葉文は、たしかにバーミヤーンK窟の弥勒像の着衣の膝(図 1-67)に見えているほか、ペンジケント第 28 室復元図の壁画装飾にも示されている(図 1-68)。したがって、これらのリュトンがバーミヤーンに結びつくことは明らかである。

水牛の上に女神のつくリュトンについて田辺勝美氏は、コイン上、牛頭の冠を被る王像はエフタルないし西突厥王とすることが出来るので、このリュトンは 6-7 世紀エフタルないし西突厥王時代にあたるという見解を示している⁷⁰。首の後ろにササーン王以来のリボン

達、或称満月、或称獅子吼、或称釈迦牟尼、或称神仙、或称盧舎那、或称瞿曇、或称大沙門、或称最勝、或称能度、如是等称仏名号其数一萬」の文。

⁶⁸ 同上『大正蔵』9, p.397b)「無尽平等妙法界、悉皆充滿如来身」、(同 p.399b)「如来法身等法界、普応衆生悉対現、如来法王化衆生、随順諸法悉調伏」の文。

⁶⁹ Dorothy G. Shepherd, "Two Silver Rhyta" *The Bulletin of the Cleveland Museum of Art*, 1966.

⁷⁰ 田辺勝美「水牛を屠る女神頭部装飾リュトン」解説、上掲注 59, p.385。

結び、多葉文の大きなイヤリングを左右につけ、高貴な仏陀の像を髻髷とさせる顔立ちと質の高さにはまさに圧倒される。

じつはバーミヤーン東大仏の天井左右に描かれた供養者群像には、鳥の翼というよりむしろ大きな牛頭冠をつけたと思われる王族と仏陀が見える。(西に描かれている供養者を観察すると、それぞれ対応していると思われるので、便宜上数字をつけた(図 1-69)。図の奇数(1,3,5,7)が王ないし王子で、偶数(2,4,6,8)が王妃ないし王子妃で、それぞれカップルらしく見え、仏陀も各壁にそれぞれ3体見える(A,B,Cとした)。ほかに先導する僧が東壁に1体見える。牛頭冠らしき冠をつけているのはNo.5の王子と仏陀のBである。)

田辺氏は、水牛と女神のリュトンをエフタルか西突厥としたが、エフタルが西突厥とササーン朝によって滅ぼされ、その後大仏の造立が始まると想定すると、バーミヤーンでの牛頭冠は、おそらくエフタルではなく西突厥すなわちチュルクの王族を示す牛頭冠ということになると思う。

東大仏壁画の人物No.1(図 1-70)を見ると、髪型は両肩に大きくさばいた様子が明らかである。上記『周書』突厥伝で「被髪、左衽」と記し、「露髪一丈許、帛練裹額、後垂」という『三蔵法師伝』の、突厥可汗の髪をバラバラにさばいたヘアースタイルがこれに近い表現だといっていいと思う⁷¹。ちなみに前田耕作氏は、この中心者について突厥の王は「顎ひげと髪を切る」として突厥の王でないとしたが、はたしてそうであろうか⁷²。

西突厥のディザブロスが交流したササーン朝のホスロー I 世の銀皿(図 1-71)に見える人物像の胸帯や首飾りがNo.1のそれに近いことは、両者に何らかの関係性があることを示しているように思える。

実際 6 世紀半ばにあの巨大な大仏を続けて二体造像できるのは、一体誰によりどのような民族国家であろうか。少なくとも、かつて小野玄妙が指摘した「強大な国家」「優秀な文化」「豊富な物資」という三条件を満たすことが必要であろう⁷³。(彼はこれを 2 世紀クシャーン王朝のカニシカ王にあてたが…) 権力と財力と人力といずれも持ち合わせていなければその達成は不可能である。支配の内実はいまだ明らかでないが 6 世紀半ばでこの三条件を満たすのは、チュルク(突厥)をおいて他にない。

もし東大仏の天井左右に描かれる供養者群像をチュルクの建国の祖ディザブロス(イステミ可汗)を中心に考えると理解はスムーズである。彼について先学のすぐれた考察がすでにあるが⁷⁴、彼は上述した通り、エフタルをササーン朝ペルシアと組んで滅ぼし『華嚴経』の

⁷¹ 上掲注 52,53, 前嶋信次『玄奘三蔵』岩波新書, 1952, p.26-27 参照。

⁷² 前田耕作『巨像の風景』(中公新書, 1986, p.138-139)。

⁷³ 小野玄妙「大乘仏教美術の起源及び其の発達体系」(『大乘仏教芸術史の研究』1, 大雄閣 1927, p.41)。

⁷⁴ 伊瀬仙太郎「西突厥起源考」(『史潮』42, 1949, p.63-80)。

サンスクリット原典『十地の支配者と名づける大乘経典』の⁷⁵、十の名に通じる十大首領を置き、十万の兵士を有し、そして十姓部落と号したと『旧唐書』に記している点が傍証となるからである⁷⁶。

また、北齊と様式上つながる点から見て、中国から仏師たちを調達したと考えられるが、上述の記録では、実際に北齊に仏教を求めたのはディザブロスではなくタスパル（佉鉢）可汗であった⁷⁷。ただし、突厥が統一されていた段階でもあるので、その後の関係性からみて、崇仏の傾向が西面可汗のディザブロスへも及んでいたという想定に私は立っている。

第4節 バーミヤーン石窟と突厥

バーミヤーン石窟と突厥の関係について、上節に補足を加えて概要を以下に述べ、当節で取り組む問題を明らかにしておきたい。

まず、東ローマの記録では、突厥の祖の一人ディザブロスについて、彼が6世紀後半強大な権力で中国の西域一帯を支配していた様子を伝えている。東ローマ皇帝ユスティノスに西暦568年に謁見した使者たちの記録として次のようにある⁷⁸。

「皇帝は通訳に助けられてスキタイ語の書簡を読み終わると、使者たちを非常に手厚くもてなした。そして、親しく使者たちにトルコの政治形態と国土について尋ねた。彼らは、自分たちの国には4君主領があるが、全民族の上につ最高権力はディザブロスだけに移っている、と皇帝に語った。そして彼がいかにかエフタル人を征服したか、いかにか完全に課税したかについて話した。（下略）」

ここでユスティノス皇帝はディザブロスがエフタルの領土をすべて支配下に置いたことを確認している。また、彼の宿営地での様子を次のように記している。

「ゼマルコスとその従者たちがそこに到着すると、直ちにディザブロスの前へ通された。ディザブロスは天幕の中で、二輪の車つきの金の椅子に腰をかけていた。（中略）その天幕は、さまざまな色を巧妙に織り込んだ絹地で内部を覆ってあった」

「その翌日、彼らは他の天幕に集まった。それはすべて絹で覆われ、装飾がほどこされていた。そこにはまたいろいろな形の立像があった。ディザブロスは純金の仰臥椅子に座り、天幕の中央には金の酒杯と壺、さらには金のジョッキも置かれていた」

⁷⁵ Daśabhūmīśvaro nāma mahāyānasūtra, 破塵閣書房, 1938。『仏典解題事典』春秋社, 1966, 玉木康四郎解説, p.86 参照。

⁷⁶ 上掲注 47, 『旧唐書』(中華書局, p.5188), 「初, 室点密可汗從單于統領十大首領, 有兵十万衆, 往平西域諸胡国, 自為可汗, 号十姓部落, 世統其衆」の文。

⁷⁷ 上掲注 24, p.1864-1865。

⁷⁸ 内藤みどり「東ローマと突厥との交渉に関する史料」(『西突厥史研究』, 早稲田大学出版部, 1988, p.374-395.のうち, p.377-378), ディザブロスの存在は伊勢仙太郎「西突厥起源考」(前掲注 74)で確認できる。

「翌日、彼等はまたもう一つの異なった天幕に集合した。その天幕は金で覆われた木製の円柱に支えられ、同様に金でつくられた寝床は、4匹の孔雀に支えられていた」
文中の、車付きの金の椅子は、バーミヤーン東大仏の天井画の太陽神が乗る二輪車と同じであろうか。また金の酒杯は、下段に述べる内容に結びつく点において、そしてベッドの足の孔雀は、ドイツ隊によって孔雀窟と名づけられた 76 窟があることなど、はなはだ興味深いものがある。

つぎに、突厥は塞外民族として辮髪を習俗としていたことが考えられる⁷⁹。その辮髪の状態の弥勒像が、バーミヤーン石窟中のE223とK330窟に見える(図1-48,1-49)。このことで、バーミヤーンと突厥両者の関係を知ることが可能であり、また後段に述べる銀製リュトン(酒杯)やコインの文様でも、両者の関係を伺うことができる。

つぎに、突厥が北齊に大乘經典の『華嚴經』を求めていたと記す『隋書』の記録があり、北齊と仏教上で共通する可能性を示している⁸⁰。そして北齊における造像を見ると、北齊三尊像レリーフ左右の立像を盧舎那仏と傍記することによる、とくに左の立像の類似性(図1-43)からみて⁸¹、バーミヤーンの東西二大仏(図1-32,1-33)は、『華嚴經』の教主ヴァイローチャナ(盧舎那)仏である可能性が高い。そして仏像の巨大化については「如来の法身は法界に等し」あるいは「無尽平等の妙法界は悉く皆如来の身に充滿す」とある『華嚴經』世間淨眼品の記述と無関係ではないと指摘した⁸²。

結論として、バーミヤーン二大仏が大乘仏教で展開されたという理解に至るとともに、その主導が突厥の人々であったということを指摘したわけである。

また上記ディザブロスの活動時期からみると、ササーン朝と交流した558～567年が、様式的に東大仏と結びつき、その造立時期の可能性を示していると述べた。一たとえば供養者群像の中にディアデム(鉢卷)のヒレ(領巾)を大きく翻す様子(図1-72)が明らかなササーン朝様式であること。

また、ササーン朝と対決し東ローマと交通した568—576年は、様式的に西大仏の壁画と結びつき、その造立時期であろうと想定した。一たとえば西大仏天井壁画に見られる琴を奏でる飛天の艶やかな姿態は、東ローマの象牙レリーフに見える馬上の皇帝を支える天女等に結びつく可能性が高いからである(図1-73,1-74)。

第5節 突厥とキジル石窟

⁷⁹ 原田淑人(前掲注51,p.51-56),白鳥庫吉(前掲注52, p.253-257)。

⁸⁰ 上掲注24,p.1865,「佗鉢聞而信之,建一伽藍,遣使聘于齊氏,求淨名,涅槃,華嚴等經,并十誦律」の文。

⁸¹ 上掲注37,Oswald Siren, plate 240A. 朴亨国『ヴァイローチャナ仏の図像学的研究』(法蔵館,2001,p.36)。

⁸² 上掲注68。

さて、6世紀後半における初期突厥の治所とキジル石窟は、突厥の治所を東南へ下るとそのままキジル石窟に至るということで、地理的にも近い関係にあることがわかる⁸³。

『魏書』西域伝の龜茲国条で「北（『隋書』で西北と記す）突厥の牙帳を去ること六百余里」と記している⁸⁴。

そして、『隋書』北狄伝の西突厥伝で、「西は金山を越え、龜茲、鉄勒、伊吾、および西域の諸胡悉くこれに附す」とあり、『北史』突厥伝附西突厥伝で「東、都斤を拒み、西、龜茲に至る…」と記している⁸⁵。

したがって、突厥が龜茲国を支配下に置いていたことは、文献上では明らかである。

つぎに、キジル石窟を開いた龜茲国は、一般に小乗仏教の栄えた崇仏王国として知られるが、6世紀中ごろには大乘仏教を好む王がいたことを『続高僧伝』（ダルマ Gupta 伝）はつぎのように記している⁸⁶。

「また龜茲国に至り、また王寺に停まる。また住むこと二年、よってかの僧のために積前論を講ず。その王、篤く大乘を好み開悟するところ多し」

と。実際、大乘仏教窟とよぶべき石窟の存在は、大像窟を中心に、たとえば47窟の列をなす立仏、あるいは27, 99窟の千仏図、13, 17窟の華嚴教主盧舎那仏（図1-75）の存在などを通して既に指摘されている⁸⁷。

また17窟は炭素年代で465±65年、47窟ははじめ350±60年と出されていて、それぞれ一応の目安がわかる。上記の大乘仏教窟と思われる石窟について樹輪校正年代を入れて以下に掲げてみよう⁸⁸。

- | | |
|-----|------------------------|
| 13窟 | 319±75～379±85（龕上泥塑の木芯） |
| 17窟 | 465±65（後室壁中の麦藁） |
| 27窟 | 640～860（主室正面壁の木材） |

⁸³ 上掲注20, 松田寿男 p.274-279。

⁸⁴ 北齊・魏収撰『魏書』102, 西域伝龜茲国条(中華書局, 1974, 6-p.2267), 「北去突厥牙帳六百余里」の文。

⁸⁵ 上掲注24, 『隋書』中華書局, 6-p.1876, 「西越金山, 龜茲, 鉄勒, 伊吾及西域諸胡悉附之」の文, 李延寿撰『北史』99(中華書局, 1971, 10-p.3299-3300), 「東拒都斤, 西至龜茲, 鉄勒, 伊吾及西域諸胡悉附之」の文。

⁸⁶ 唐・道宣撰『続高僧伝』ダルマ Gupta 伝(『大正蔵』50, p.435)「又至龜茲国, 亦停王寺, 又住二年, 仍為彼僧講積前論, 其王篤好大乘多所開悟」の文, 下注, 宿白論文 p.176, 金維諾論文 p.235 参照。

⁸⁷ 宿白「キジル石窟の形式区分とその年代」(『中国石窟キジル石窟』1, 平凡社・文物出版社, 1983, p.175-177.), 金維諾「龜茲芸術の特徴とその成果」(『中国石窟キジル石窟』3, 平凡社・文物出版社, 1985, p.233-237)。

⁸⁸ 同上, 宿白論文(p.173-174), 「克孜爾石窟 14C測定数拠一覽表」(『克孜爾石窟内容総録』, 新疆美術攝影出版社, 2000, p.301-304)。

47 窟 10±50 (小円木の柱) , 260±70 (小円木の柱) , 280±80 (木材) , 330±60 (小木材) , 350±60 (後室涅槃台下壁中の麦藁) , 365±45 (主室壁中の麦藁)

99 窟 411~637 (後室天井中の麦藁)

ただこの炭素年代は、同じ石窟でも資料によって、あるいは採取場所で違いが生じている。後代に石窟を重修して壁画の塗り替えをした場合までを考慮すると、とくに 47 窟の場合などは 6 種の判定が出されていて、開鑿年代のものかあるいは壁画の年代か重修なのかは、慎重な判断が求められる。けれども、どの窟も 4-6 世紀に活動し、その後 7-9 世紀に及ぶものがあると理解することは可能であろう。

様式上などこれまでの編年を基本にして敦煌石窟の場合で検討すると、敦煌で隋代から顕著になる定型化した仏説法図がキジルでは現れていないこと。また盧舎那仏がキジルの 13 窟、17 窟で描かれていること、そしてキジルの涅槃図は、盧舎那仏も描く敦煌の北周 428 窟の涅槃図 (図 1-76,1-77) に最も近いことなど。これらを考慮すると、キジルにおける大乘仏教の関係する石窟の時期は、敦煌と比べてあまり古く遡るものではなく、やはり敦煌に並行した形で、早くて 5 世紀、全体的には 6 世紀後半、いわゆるキジル石窟第 2 隆盛期以降にあてることによいと思われる⁸⁹。

キジル石窟の辮髪の仏菩薩像についてみると、第 69、76、77、118、123、205、207 窟で見出される (図 1-78)。ほかにクムトラ石窟の GK20、同 21 窟に見えている。69 窟は、今はない大立仏を中心とする 47 窟が、奥壁に大きな涅槃図を伴う点 (図 1-79) で、部分的に一致する。そして 77、205、207 窟は、立仏画の存在は剥落などではっきりしないが、奥壁に大きな涅槃図あるいは涅槃像を置く石窟として共通している。また 123 窟は左壁に立大仏が描かれ (図 1-80) 、光背に同形で小仏像を表わして、三世十方に無数の仏が存在する、いわゆる大乘仏教の多仏思想を表現している。

辮髪の仏菩薩を描く以上の石窟の中で、これまで知られている炭素年代を以下に掲げてみよう⁹⁰。

69 窟 1434~1643 (主室前壁門框の木材)

76 窟 680~980 (東壁の麦藁)

77 窟 -92~+130 (外室左右壁の木材) , 173~405 (後室東壁の木材)

118 窟 75~322 (主室西壁と南壁下部の麦藁)

123 窟 540~670 (後室天井部の麦藁)

207 窟 540~680 (主室正面壁下部の木材)

⁸⁹ 中野照男「キジル石窟壁画の年代」(『歴史公論』105,雄山閣,1984,p.99-107),キジル石窟の年代区分の研究は、晁華山「20 世紀初頭のドイツ隊によるキジル石窟調査とその後の研究」(『キジル石窟』3,平凡社・文物出版社,1985,p.241-261)を参照。

⁹⁰ 上掲注 88 に同じ。

69窟は後代に修復された時の用材であったようで、77、118窟は時代を遡る傾向にある。ともかくここでは、ともに中心柱窟を持つ123窟と207窟が予想した時代にふさわしいことが知られて興味深い。

さて、キジル205窟の壁画には、聖獣鳥文図があり(図1-81)、突厥のコインにも類似の文様を見出す(図1-82)。これは聖鳥のシームルグとよばれ、ササーン朝ペルシアの工芸品には数多くこれらが表わされているので(図1-83)、ササーン朝ペルシアの時代に突厥とキジル石窟が文化的に結びつくことを物語っている⁹¹。

またキジル118窟の菩薩のつける花飾りのイヤリングは(図1-84)、バーミヤーン出土の銀製馬リュトンと一緒に発見された、同じく銀製の女神リュトンがあり(図1-85)、このイヤリングの花飾りに類似していることがわかる⁹²。これらの花飾りの簡便化した文様は、クムトラ石窟GK21窟の辮髪の菩薩像でも像の周囲に見ることができ、また下方縁取りの十字花文は、上図2の菩薩の膝、あるいは118窟の上部框に描かれている模様と角度は異なるが同一であろう(図1-86)。したがって、この点でもキジル石窟とバーミヤーン石窟が突厥と結びつく可能性がみえる。

第6節 まとめと展望

結びに本章で取り上げた問題をまとめ、最近の14C年代の結果を追記しておきたいと思う。

1. 6-7世紀のバーミヤーンは、研究史上でみても多角的に言及されている。なかでも桑山氏の提示した6世紀半ばが、バーミヤーンを画する交通路の変化の時期であるとの指摘は重みがある。これはエフタルに代わって突厥が支配したことに結びつく可能性があるからである。

宮治氏はバーミヤーン石窟の活動年代を種々の美術様式を検討して、6-8世紀が射程範囲との見解を示した。この範囲の更なる絞り込みが今後の課題であるが、二大仏については6世紀半ばから7世紀前半までに絞られていることが研究史の中で見えている。

西側の史料では、突厥が563年-567年の間でエフタルを滅ぼしたとあるが、中国側の史料でもエフタルが558年をもって遣使が途絶え、突厥に滅ぼされたと伝えている。文献上ではここに画期がある。

2. バーミヤーンが当時突厥の支配下にあったか否かは不明瞭であるが、玄奘の記録で北と南にすでに突厥の勢力が入っている様子があるので、これからみて、バーミヤーンが突厥と全く分離した存在と考えるのは不自然である。

突厥はその初期に、北斉との交流で仏教を積極的に受容した記録がある。なかでも『華嚴経』を求めたと記す点が注目される。

⁹¹ 田辺勝美・深井普司『ペルシア美術史』(吉川弘文館,1983,p.146,153), 姜伯勤『中国祇教芸術史研究』(三聯書店,2004,p.65,99)。

⁹² 上掲注69。

3. 西突厥の祖ディザブロス（イステミ可汗）については東ローマの記録があり、強大な力で西域一帯を支配したことを伺わせている。

バーミヤーンにおいて直接ディザブロスに結びつく文物等は明らかではない。ただし、バーミヤーン石窟にみられる弥勒像の髪型に、組み紐に編んで数条に垂らした様子が見え、これが辮髪にあたると思われるので、突厥が当地で支配した可能性が考えられる。

バーミヤーンの二大仏壁画に見える供養者のチュニック服は、ひろく西域全土に見ることのできる服装であり、突厥もこれを着用したと考えられる。ただ、ソグドやエフタルとどのような差異があるかは未確認である。

4. 東西二大仏の尊格は、突厥の北斉への取経を伏線として、形態上で初期のヴァイローチャナ（盧舍那）仏の可能性が高く、仏名の語源が太陽を意味することから東大仏の天井に描かれている太陽神と結びつく。

東大仏の天井東西には供養者の群像が描かれているが、東西は同一の群像の可能性が高い。また、牛頭らしき冠をつける像に着目すると、銀製リュトンやコインとの関係から突厥のかわりが見えてくる。

5. 関係者について西突厥のディザブロスを中心に想定すると、東大仏の造像時期は、エフタルが北周へ最後の遣使をした 558 年以降で、彼がエフタルを滅ぼす時期 563—567 年を含み、ササーン朝と交流していた 568 年までであれば、ササーン朝の影響が伺える供養者のリボンをつけた様式からも納得することができる。

またササーン朝と隙を生じ、東ローマ帝国と交流した 568 年から 576 年までであれば、壁画に西洋的な天人達を描き様式的にも近いので、これを西大仏の造像時期として想定することができるであろう。これは、宮治氏のいう接近してこの順序で二大仏が造像されたという指摘に符合するものである。

6. 平成 13 年（2001）3 月タリバーンにより破壊された大仏の残骸の中から壁画断片を拾い、ドイツ隊が独自に 14C 年代の測定をおこなった。最初の報告は簡単なものであるが、東大仏が AD 507±15 年、西大仏が 551 年±12 年という結果であった⁹³。その後それぞれおよそ 50 年新しくなることが明らかになったという（単純に足せば東大仏が AD 557±15 年、西大仏が 601 年±12 年ということになる）。今後の詳しい測定結果の公表が待たれるが、本稿の想定に近い結果をもたらしていることに驚き、筆者は意を強くしている。

7. バーミヤーン石窟とキジル石窟は、6 世紀から 7 世紀にかけて涅槃図の哀悼表現の共通性を通して、互いに密接な関係にあることが既に指摘されていた⁹⁴。したがって、本稿では

⁹³ 2004 年 12 月 18 日「バーミヤーン遺跡保存に関する代回専門家作業グループ国際会議」（東京）での発表、宮治昭「バーミヤーン美術史研究と放射性炭素年代」（『バーミヤーン仏教壁画の編年』明石書店、2006、p.137-138）参照。

⁹⁴ 宮治昭「中央アジア涅槃図の図像学的考察—哀悼の身振りと摩耶夫人の出現をめぐる—」（『仏教芸術』147、1983、p.11-13）。

更に、この時期で辮髪の仏菩薩像を双方に見出すことから、あるいは聖鳥シームルグを通して、またリュトンを通して見られる花飾りイヤリングで、その背後に突厥王国の存在を指摘した。

天和3(568)年、北周の武帝が突厥の娘、阿史那氏を王后にしてから、龜茲はじめ、疎勒、安国、康国の舞樂が、大いに長安に知られていったと記す『旧唐書』音楽志の記述は⁹⁵、上記敦煌における428窟が、盧舎那仏と涅槃図の存在で、北周時代(557-581)に位置づけられていることと考え合わせてみると、この突厥王国の関わりを傍証しているものと言っていいと思う。

⁹⁵ 上掲注47『旧唐書』中華書局,p.1069,「周武帝聘虜女為后,西域諸国來賸,於是龜茲,疎勒,安国,康国之樂,大聚長安」の文,金維諾,上注87,p.230参照。